

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと  
 主 女 弟 子 復 活 光 音  
 づれを てんしより ききうけえ て、  
 天使 聞 受  
 げんそよりの ていざいをふる いすて、しと徒  
 原 祖 定 罪 振 棄 使 徒  
 にほこりてい え り、し はほろぼさ  
 誇 曰 死 滅  
 れ、ハリストスか みはふくかつして、せかいに  
 神 復 活 世 界  
 おおいなる あわれみをたま えり。  
 大 憐 賜

【 階梯者イオアンのトロパリ 第1調 】

ほうしんなる わがしんぷイオアンよ、な爾  
 捧 神 我 神 父  
 んぢは ののじゅうしゃにしてにくたいにおけるて天  
 野 住 者 肉 體 於 天  
 んし およびきせきしゃとあらわれたり。な爾  
 使 及 奇 跡 者 顯 爾  
 んぢはものいみと、けいせいと、きとうと  
 齋 警 醒 祈 禱  
 をもって てんのおんしをえ て、しんをもつて  
 以 天 恩 賜 獲 信 以

な ん ぢ に は し り つ く も の の れ い た い の や  
 爾 趨 附 者 の 靈 體 の 病  
 ま い を い や し た も お う 。 こ う え い は な  
 醫 給 光 榮 爾  
 ん ぢ に ち か ら を あ た え し し ゅ に き し 、 こ う え  
 力 與 主 歸 光 榮  
 い は な ん ぢ に え い か ん を こ う む ら せ し し ゅ に き  
 爾 榮 冠 冠 主 歸  
 し 、 こ う え い は な ん ぢ を も っ て し ゅ う に  
 光 榮 爾 以 衆  
 い や し を た も う し ゅ に き す 。  
 醫 治 賜 主 歸

【 階梯者イオアンのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸  
 す 、  
 き ょ う ど う し イ オ ア ン 、 わ れ ら の し ん ぷ よ 、 し ゅ  
 嚮 導 師 我 等 神 父 主  
 は な ん ぢ を ま こ と の せ っ せ い の た か き に 、 う  
 爾 眞 節 制 高 動  
 ご か ざ る ほ し 、 そ の ひ か り を も っ て し き ょ く を み  
 星 其 光 以 四 極 導

ちびくものとして おきたま えり。  
者 置 給

【 復活のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
今 何時 世 世

わがきゆうせいしゅおよびしよくざいしゅはかみと  
我 救 世 主 及 贖 罪 主 神

して、ちにうまれしものをかせより  
地 生 者 桎 梏

ときて、はかよりふくかつせしめ、  
釋 墓 復 活

ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして  
地 獄 門 破 主 宰

みっかめにふくかつしたま えり。  
三 日 復 活 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

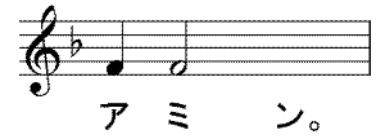
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生

神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 せ い なる か み、 せ い なる ゆ う  
 聖 神 聖 勇  
 き、 せ い なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等  
 あ わ れ め よ 。

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ざ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ</sup>光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、<sup>いま いつ よよ</sup>今も何時も世に、 )

【 <sup>プロキメン</sup> 提綱 主日第4調 及び克肖者の第7調 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup>慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

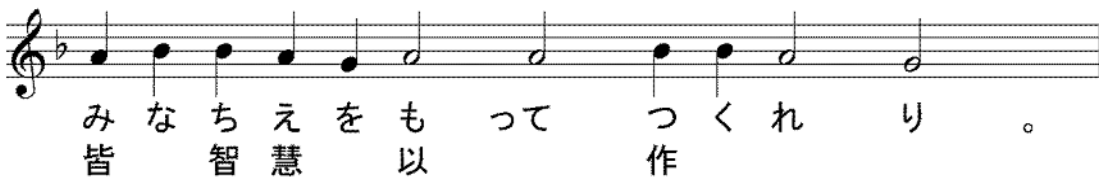
司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>しゅ なんぢ しわざ なん おお みなちえ もつ つく</sup>プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

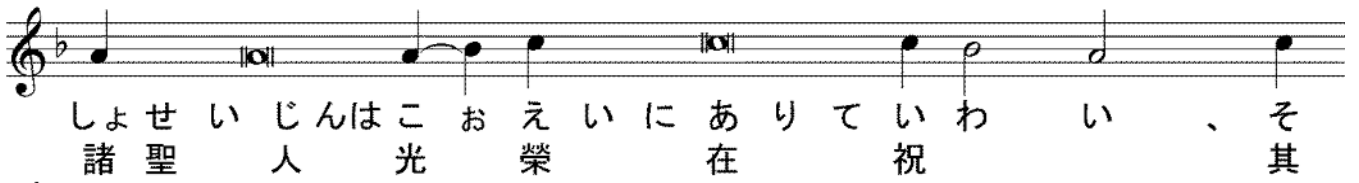
しゅ よ、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き、  
 主 爾 工業 何 大  
 み な ち え を も っ て つ くれ り 。  
 皆 智慧 以 作

誦經) <sup>わ たましい しゅ ほ あ しゅわ かみ なんぢ いた おおい</sup>我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き、  
 主 爾 工業 何 大



誦經) <sup>しよせいじん こうえい あ いわ そのとこ あ よろこ</sup> 諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし、



【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 314 端 エウレイ書6章13節~20節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しよ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい かみ きょやく たま とき おのれ おおい もの いつ さ ちか</sup> 兄弟よ、神はアヴラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべき  
<sup>ゆえ おのれ さ ちか い われかならずしゆくふく なんぢ しゆくふく ま なんぢ</sup> なきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾  
<sup>ま か ごうにん きょやく ところ え けだしひと おのれ おおい</sup> を益さんと。斯くアヴラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大  
<sup>もの さ ちか かつこと かくしょう ちかい かれら およそ そうろん や ゆえ かみ きよ</sup> なる者を指して誓う、且事を確證する誓は彼等の凡の争論を息む、故に神も許  
<sup>やく つ もの おのれ むね かわ さら あきらか しめ ほつ べつ ちかい た</sup> 約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、  
<sup>こ ふたつ かわ もの おい かみ かつわ あた ゆえ われらこ ふたつ もの もつ たしか</sup> 斯の二の易らざる者に於て神は語る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確  
<sup>なぐさめ え ため けだしわれら はし わ まえ あ のぞみ と もの こ のぞみ われ</sup> なる慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る望を執る者なり。此の望は我  
<sup>ら たましい ため かつ うご いかり ごと かつまく うち い すなわち</sup> 等の靈の爲に堅くして、動かざる錨の如し、且幔の内に入る、即イイスガメル  
<sup>はん したが よよ さいちよう な われら ため ぜんく い とこ</sup> キセデクの班に循いて、世々の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし所なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそう

はっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれていた望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

\*\*\*\*\*

【 アポストロス 使徒経 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

誦經) けいてい ひかり こ ごと おこな けだしん み およそ じあい こうぎ しんじつ あ なんぢ 兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾  
らかみ よろこ ところ なに つまびらか み むす くらやみ おこない あづか なか 等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、  
むしろこれ せ けだしかれら ひそか おこな こと い または べ およ せ こと 爾之を責めよ。蓋彼等が隱に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は  
ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い い ものお し 光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死  
ふくかつ なんぢ てら ここ もつ み おこない つつし むち もの ごと より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を慎みて無智の者の如く  
すなわちち もの ごと とき おし ひ あ こ ゆえ しりよ もの せず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は悪しければなり。是の故に思慮なき者  
な なか すなわちかみ むね なに さと またさけ よ なか こ よ ほうとう と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、  
すなわちしん み せいえい かしょう ぞくしん しふ もつ くち と な ころ わ 乃神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、  
しゅ さんび 主を讚美せよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と眞実との実を結ばせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥づかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにはではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと靈の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

\*\*\*\*\*

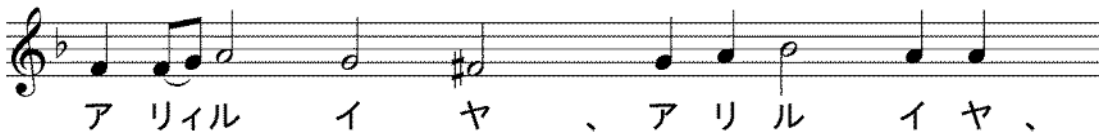
【 アリルイヤ 主日第4調 及び克肖者の第7調 】

司祭) なんぢ へいあん 爾に平安、

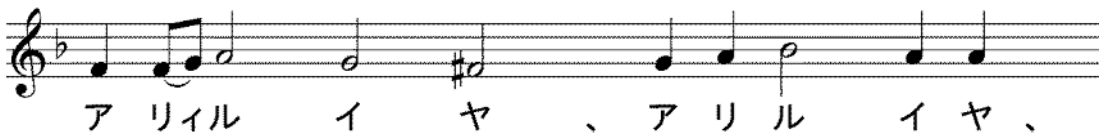
誦經) なんぢ しん 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

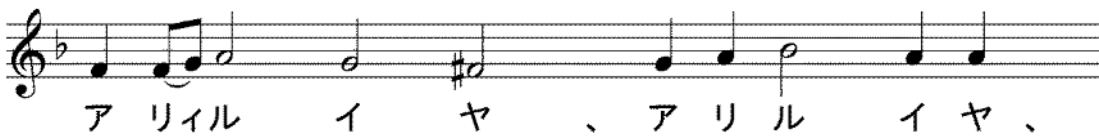
誦經) <sup>かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんぺい せいちよく けんぺい</sup> アリルイヤ、神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



誦經) <sup>なんぢ ぎ あい ふほう にく</sup> 爾は義を愛し、不法を惡めり



誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

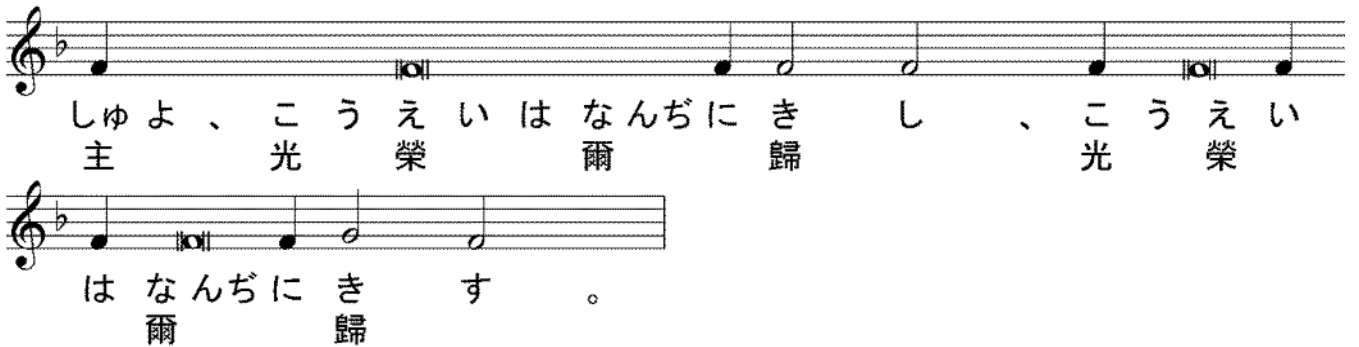
【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書40端 9章17~31節 】



司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時或人イイススに就きて、伏拜して曰えり、師よ、我瘡の鬼に憑

られたる我が子を爾に攜え來れり。鬼は何處に彼を執うとも、投げ付し、彼沫を噴き、

齒を切り、體枯る、我爾の門徒に之を逐い出ださんことを請いたれども、彼等能わざり

き。イイスス彼に答えて曰く、噫信なき世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時まで

か爾等を忍ばん、彼を我が許に攜え來れ。乃彼を攜え來れり、彼イイススを見れ

ば、鬼忽彼を拘攣させ、彼地に仆れ輾びて沫を噴けり。イイスス其父に問えり、彼に

斯く爲りしは何の時よりか。曰えり、幼き時よりなり。鬼は彼を滅さん爲に、屢火

に又水に投じたり。爾若し何をか能せば、我等を憫みて、我等を助けよ。イイスス之

に謂えり、爾若し幾何か信ずることを能せば、信ずる者には能せざることなし。童子の父

ただち涙を垂れて、呼びて曰えり、主よ、我信ず、我が不信を助けよ。イイスス民の趨せ

集るを見て、汚鬼を禁めて、之に謂えり、瘡にして聾なる鬼よ、我爾に命ず、彼よ

り出でて、再彼に入る勿れ。鬼號びて、甚しく彼を拘攣させて出でたり、彼は死せ

し者の若くなりて、多くの者彼死せりと云うに至れり。イイスス其手を執りて、彼を起し

たれば、彼即立てり。イイスス家に入りし時、其門徒私に彼に問えり、我等が之を逐

い出だす能わざりしは何の故ぞ。彼曰えり、祈禱と齋とに由らざれば、此の類は出づる

え 得ざるなり。かれらかしこ い す かれ ひと これ し ほつ 彼等彼處を出でて、ガリラヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。

けだしそのものと おし ひと こ ひとひと て わた ひとひとかれ ころ ころ のちかれだい 蓋 其門徒に教えて、人の子には人人の手に付され、人人彼を殺し、殺されて後 彼第

さんじつ ふくかつ い 三日に復活せんと曰えり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの靈につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。靈がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、齒をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この靈を追い出してくださいように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。靈がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。靈はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた靈をしかって言われた、「おしとつんぼの靈よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。すると靈は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして靈を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

\*\*\*\*\*

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 10 章 4 節 25～5 章 12 節 】

司祭) か とき 彼の時、ガリラヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民 彼に 従え

り。いすす 群衆 を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。彼口を啓きて、

これ おし い しん まづ もの さいわい てんこく かれら もの なもの 之を 教えて曰えり、神の貧しき者は 福 なり、天國は彼等の有なればなり。泣く者は

さいわい かれらなぐさめ え おんじゅう もの さいわい かれらち つ 福 なり、彼等 慰 を得んとすればなり。温 柔 なる者は 福 なり、彼等地を嗣がんとすれ

ばなり。義に飢え 渴く者は 福 なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜 恤ある者は 福 なり、

かれらあわれみ え こころ きよ もの さいわい かれらかみ み わへい 彼等矜 恤を得んとすればなり。心 の清き者は 福 なり、彼等神を見んとすればなり。和平

おこな もの さいわい かれらかみ こ な ぎ ため きんちく もの  
を 行 う 者 は 福 なり、彼 等 神 の 子 と 名 づ け ら れ ん と す れ ば なり。義 の 爲 に 窘 逐 せ ら る 者

さいわい てんこく かれら もの ひとわれ ため なんぢら ののし きんちく なんぢら  
は 福 なり、天 國 は 彼 等 の 有 な れ ば なり。人 我 の 爲 に 爾 等 を 詬 り、窘 逐 し、爾 等 の

こと いつわ もろもろ あ ことば い としき なんぢらさいわい よろこ たのし てん  
事 を 譎 り て 諸 の 悪 し き 言 を 言 わ ん 時 は、爾 等 福 なり、喜 び 樂 め よ、天 に は

なんぢら むくいおお  
爾 等 の 賞 多 け れ ば なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびたしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
主 光 榮 爾 歸 光 榮  
はなんぢにきす。  
爾 歸

※ 聖体礼儀③ (聖大ワシリイ) へ